

[書籍紹介] 正橋剛二(解説) 山本溪山(著) 『入越日記』能登・越中・立山に薬草を求めて

著者	板垣 英治
雑誌名	北陸医史
号	40
ページ	44-59
発行年	2018-03-10
URL	http://hdl.handle.net/2297/00052403



書籍紹介

金沢市 板垣英治

正橋剛二解説、山本溪山著「入越日記」

能登・越中・立山に葉草を求めて

(桂書房、2017年12月20日初版発行A5判、

197頁 定価3千円＋税)。

本書は序文に記載されたように、京都の山本読書室の第11代当主山本溪山(章夫)が25才の頃の嘉永4年4月(1851)に京都を出発、米原、金沢、能登、高岡、立山への大行脚を行った時の164日間の旅の記録である。原文は漢文で記載されている。故正橋先生は本書の読み下しを行い、地名、人名、植物名などには補注を加え、特に「金沢城下図」、「能州道中図」、「越中国立山図」などを引用して、町村の存在する位置の理解を補った。各地で採取した植物は漢名表記のため、その植物名(和名)を「本草綱目啓蒙」などの本草書および植物図鑑を参考にして解説して、和名で表記し、更に絵図・写真を加えて、本草の理解を補った労作である。本書には219種の植物、98人の人物、

および87首の詩作が収録されており、これらの解説を中心に補注が行なわれた。

本書により幕末期の金沢および能登地域および立山地域の知見を直接に溪山の目を通じて身近に知ることが出来る。特に溪山は山本亡羊読書室で本草学を学び、絵画を得意とした人物で在り、能登半島の海岸の険しい岩壁、例えば巖門の巨大な岩を写し取っていた。

正橋氏は本書の内容を、『啓迪』(京都医学史研究会誌)16―18号、および『医譚』(日本医学史学会・関西支部発行)73―76号に7回に分けて連載していたものであり、これらを纏めて、今回の『入越日記』解説として刊行されたものである。原文の漢文を読み下した文章で記載されているため、現代文ではないために、やや難解なところも見かけられる。特に多くの詩作品には中国の古典の引用が多く行われているために、解説するためにはこの古典の予備知識が必要である。

本書は旅行記であるから以下の記述では、日々の旅の記録の内容について、採薬を中心に置き、興味深い記述のある部分を考察することにした。

引用された植物名はすべて牧野新日本植物図鑑(北隆館)(1977)、原色牧野和漢薬草図鑑(北隆館)、「加

賀能登の植物図譜」小牧旌著（1987）および「救荒本草通解」卷之三、岩崎常（灌園）著（1816）で確認した。植物写真のあるものは和名の上に*を付けた。漢詩は題目と番号で示した。日付は嘉永4年4月1日から始まっている。

4月

1日 京都発、道を渋谷越えに取る。一旅装の人より岩鏡草を受け取る。草津に宿をとる。

岩鏡草 II *イワカガミ（ユキノシタ科）

2日 草津を発ち、守山、鏡山、武佐、（越知川）鳥井本を経て米原に着く。沿道に白鷺が多いことを目にする。

3日 北国道を選び、長浜、（賤ヶ岳）を越え、余呉湖畔の木之本をすぎ、山道を柳瀬（梁瀬）、樺井に進む。この地域にはあぶらぎり（オオアブラギリ）が多くあり、その種より油を採取している。

4日 樺井から中河内へ。

罌子桐（とうと） II *アブラキリ（トウダイグサ科）

草牡丹 II ヤマシヤクヤク（ポタン科）

願掌草 II ニリンソウ、ガシヨウソウ（キンポウゲ科）

延齡草 II 立葵、タチアオイ（ユリ科）

延胡索 II *エンゴサク（ケシ科）

鉞形草 II *クワガタソウ（ゴマノハグサ科）

頭陀菜種 II ズダヤクシユ、黄水枝（ユキノシタ科）

紺蓮 II ベニハス（スイレン科）

七葉樹 II トチノキ（ムクロジ科）

栃木嶺よりの谷間にトチノキが多くある。トチ餅を味わう。非常に美味にして、キビダンゴの如し。板鳥関より今庄を経て鯖江に着く。

5日 鯖江より浅水（アソウズ）を経て福井に入る。九頭龍河の舟橋をわたる。これは古い浮き橋である。長崎、金津、北潟湖を船でわたり、吉崎に宿をとる。この湖の眺望はすこぶる優れており、蓑笠をとり、作詩にふける。

① 丘谷連綿として四方緑なり

6日 吉崎御坊（本願寺）へ行き、蓮如の手植えの松（お花松）を拝見する。

7日 宮永理兵衛（嘉告）、大聖寺藩士を尋ねる。本

草学、茶道、剣、禅に通じる文人である。宿に
戻り、大蟹（ずわいかに）を食べる。伊藤又一

郎（大一郎）に会う。彼は読書室の仲間である。

8日 再び宮永氏を訪ねる。酒を飲み、食を楽しむ。
随聞隨記を習う。

9日 大聖寺発、作見、動橋、月津、小松に至る。

安宅の浦に散歩する。

秦皮樹トネリコ（モクセイ科）

10日 小松を発ち金沢に着く。街道の脇には悉くトネ
リコである。海岸は白砂で数里おわれ、ハマ
エンドウ、ハマボウフウが多く見られる。

元吉（本吉）、手取川河口の町でフグを嗜む。

フグは腹を切り開き、内臓の血液を洗い流す。

これを葦簾に置き乾かす。この作業がすべての

民家で行われていた。ハラゴ（卵巣）は大きく、

タラコの様あり、これを塩漬けにして食すとい

う。（フグ卵巣の除毒は高濃度の食塩水に漬け

込み、1、2年間静置することにより、脂溶性

の毒が塩析作用により取り除かれている。）（1

金沢では、岡島玄俊氏を訪ねる。氏は文化八年

に生まれた越中氷見町の医師西井良朔の子で
あり、前田監物の手医師顕亭の養子であった。

天保三年頃に読書室に入門した人物である。

12日 金沢滞在。前田監物に合い、画と詩を求めら
れる。

②玉蘭山に鶴の図と題する詩

14日 金沢市中遊覧

田中兵庫（明倫堂教師）、藤田玄庵（不詳）を

尋ねる。午後、岡島玄俊と共に金沢城を周覧し、

浅野川大橋、九人橋をへて、奥村内膳（味噌蔵

町）（一万七千石）を観る。年寄衆の者、八家の

一人であり、貴族である。本多播磨守（五万石）、

今枝内記（一万四千石）の人持組衆の余家によ

り城の東辺を固めていた。城の瓦は皆鉛で鍍金

し、遠く望めば白金の瓦の様であった。（鉛瓦

は木枠に鉛板を張り付けたものであった。鉛の

表面の酸化により酸化鉛となり白色化してい

た。）城の堀（濠）は広くまた深く、「百間堀」

と呼ばれた。竹沢御殿（現兼六園の地）は前田

斉広ちひろが隠居所として建てた。先候の終焉の所で

ある。前田内蔵助、前田織部の館を観る。仙石

町の明倫堂を訪れ、ついで香林坊橋、犀川大橋を渡り、犀川畔に至る。旧寺町から玉泉寺、六斗林、地黄煎町から十一屋に至る。民家も多く在り、屋根はラクダの背の様に見える。大きい庭園をのぞき見したが、変わった草は見られなかつた。宝集寺(真言宗)、桂厳寺(曹洞宗)(現・寺町一丁目)をへて寺町を通り、一ノ橋(現・桜橋)を渡り、川沿い十三間町、油車より不明門(不詳)、神護寺(西町一丁目、現・大谷廟所)を過ぎ、寺の傍に東照君の祠堂がある(當時は城内にあつた。現在・尾崎神社なり)。大手門櫓台を観る。この近くの東惣構堀に架かる胡桃橋を渡り、また浅野川へ出て岡島氏宅に帰る。夜は毘沙堂(下小川町、天台宗)、来教寺に遊ぶ。顕亭翁に詩を献呈する。

15日

金沢卯辰山閑歩

玉川惣左衛門への詩三首、画三帳

④故園の社祭は前日に在り ⑤扇面山水

⑥扇面梅花黄鳥(鶯)

岡島氏への御礼、一画、一詩で礼を表す。

16日

⑦物々に驚きて海国の珍を観る
市中再見

卯辰山の真成寺には俳優中村歌右衛門の墓地あり。高らかにその履歴が記されている。

17日

卯辰山採薬

午後、又玄俊と卯辰山へ採薬に赴く、春日山まで

木藜蘆 Ⅱ *ハナヒリノキ、(ツツジ科)

木本黄精葉鈎吻 Ⅱ カノウツギ (バラ科)

藤木 Ⅱ ヤマエンジャ (マメ科)

鋏形草 Ⅱ クワガタソウ (ゴマノハグサ科)

赤茂能 Ⅱ イワハゼ、アカモノ (ツツジ科)

18日

金沢発 高岡着

金沢、津幡、(騎乗) 俱利伽羅嶺に着く。遠望に立山を見て感激する。今石動、小矢部川を経て高岡に着く。棚田屋喜作(高岡の薬種商人)の家を訪ねる。服部季逸(読書室、会員)に遇う。

刺楸 Ⅱ *ハリキリ、シシユウ(ウコギ科)

鬼督郵 Ⅱ キトクユウ、スズサイコ(ガガイモ科)

クルマバソウ Ⅱ (アカネ科)

19日

(新歴5月19日) 高岡、日下家訪問

20日 高岡滞在

上子几城（医師）、高峰元種、逸見方舟、長崎

言定らを訪問する。

21日 佐渡三良、沢田早雲来訪。

22日 上原文伯、島津逸彦（北溪）来訪。

23日 服部三郎左衛門、島津清五郎来訪。

24日 古城閑歩。上子几城、越前屋甚藏と古城に遊ぶ。

桜馬場に至る。

25日 古城再遊。採葉。

大戟Ⅱ*タカトウダイ（トウダイクサ科）

狗舌草Ⅱオグルマ（キク科）

藤本Ⅱヤマエンジュ（マメ科）

作詞 ⑧山水図 ⑨千葉蓮

26日から5月3日の間は、松田、高田、二鳳、

李逸、元種、逸見、白崎、上原、方舟らとの杯

をかかず懇親が続いた。その時に詠んだ詩作で

ある。

⑩鶉鳩（いえぼと）の声裡雨濛々たり

⑪高方舟の韵につぐ

⑫服李逸の韵につぐ

⑬三竿日上り夢初めて回す

5月

4日 端午節句

朝食は薯蕷を供し、これを以て節物と為すとあ

るが、この漢名は「ナガイモ」である。菖蒲と

艾葉（ヨモギ）を用いて童児の節句の飾りの説

明あり。「菖蒲倍」という。

繁久寺、瑞龍寺に遊ぶ。前田利長の墳墓あり。

前田利常が先代利長の菩提寺である。

6日 在宅し詩作に耽る

⑮鍾馗賛 ⑯山水図 ⑰扇面黒竹 ⑱鶴

⑲虎

14日から20日は記載少なし

21日 滞留高岡 島津彦逸の「能州名跡志」を示し、

併せて詩を付す

⑳蛭子賛 ㉑四君子賛 ㉒利久賛 ㉓劍仲賛

24日 長崎氏を訪ねる。書画介石数十品を見る

㉔名画法書見守るも未だ終わらず

26日 高岡二上山採葉

㉕陟り来たる神保古城の辺採葉の収穫はない

27日 暴風雨、微雷

⑭杉柏蒼然として緑紗を映し

28日 手紙を出す

6月

1日 高岡習俗「五色豆」牌餅2片を上におき、饅頭

2、3枚で押さえる

②⑥泥莖

6日 能登周遊計画をつくる

7日 高岡出発

午前十時に高岡を発つ、二鳳と三郎左衛門と溪山の3人である。立野、福岡では人家ではハマスゲの田を持ち、スゲ笠作りを生業としていゝる。今石動、俱利伽羅を通る。高さ数尺の朱色の実がついた天竹（ナンテン）と言われているものを、近くで見ると黄精葉鈎吻カナウツギ（バラ科）である。

8日 津幡発、これからの道中は能州道中図を使用する。野瀬（能瀬）で河北潟を目にする。雁金、兎毛（宇ノ氣）、高松と経る。ここで海浜道を取る。此処より三崎にいたる。此処は外浦であり、外洋に接している。海岸は白紗満目波は怒濤、雷の様である。旅人は騎乗してこの浜を行く。

②⑦余高松に自ら馬に乗つて来た。戯に一絶を賦す。自分の様子を詠い挙げてゐる。

9日

川尻川を渡り今浜に着く。羽喰（羽咋）を経て、一宮に宿を取る。羽咋はウナギの美味しい所である。海岸にはハマナス（玫瑰）（バラ科）あり。一宮を發て、滝谷、妙成寺（日蓮宗の古刹）を訪ねる。塔頭が五寺（玉寿寺、善任寺、大鏡寺、円融寺、大覚寺）あり。出村川尻に往く。青蘭Ⅱムシャリンドウ（シソ科）

②⑧蚌は桃花に類し紅灼々たり（トブガイ）

婦女数百人が砂浜に群を成して、竹器を手に、海藻の石花菜（テングサ）を拾っている。これを此の地では「衛吾」（エゴ）と言ひ、米粉と混ぜて、搗いて餅ダンゴ（糕）とする。また瓊脂（トコロテン）にする。

10日

高浜から富来、福浦、川崎に達する。村松保一郎を訪ねる。祖父は標右衛門（本草学者、小野蘭山との交友あり）である。当家に宿を取る。村松家で介品数百、古陶器20余、植物標本10余帳を見る。晚餐にはタイの刺身を頂く。これは朝、人を富来にやり採れたてのものを入手した

とのこと。

11日 雨のためにさらに一宿を願う。夜、イナゴ送りの行事を見る。情を慰められる。

③〇一別今に二十年

12日 町居村発 富来に赴く。山道一里余り、白雲谷に満ち、遠望は臨めず。

綿葉Ⅱニシキソウ、(トウダイグサ科)

鬼督郵Ⅱスズサイコ(ガガイモ科)

四照花Ⅱヤマボウシ(ミズキ科)

七海で海浜に出る。

蛇床子Ⅱヤブジラミ(セリ科)

木本忍冬Ⅱスイカズラ(にんどう)(スイカズラ科)、

浜菊Ⅱハマギク(キク科)

砂引岩薇Ⅱ不詳

仙台萩Ⅱセンダイハギ(マメ科)

蝦夷車前Ⅱエゾオオバコ(オオバコ科)

福浦に向かい、舟を雇い、七海を経て、怪巖石を見る。機具、鷹巢、巖門、にある奇巖をスケッチする。また詩に映す。

13日 富来滞在

14日 富来発 総持寺

八幡浜で小介を拾う。高爪の海浜で行く。

欒華Ⅱランカ、欒樹(モクゲンジノキ)(ムク

ロジ科)

琉璃Ⅱ*ルリソウ(ムラサキ科)

立波Ⅱ*タツナミソウ(シソ科)

日光萩Ⅱニッコウハギ(マメ科)

下毛Ⅱシモツケソウ(バラ科)

費菜Ⅱ*キリンソウ(ベンケイソウ科)

玫瑰Ⅱ*ハマナス(バラ科)

菩提樹Ⅱボダイジュ(シナノキ科)

威霊仙Ⅱ*クカイソウ(ゴマノハグサ科)

寺口に宿を取る。総持寺の堂房を隈無く観る。

規模広大、真に能州第一の大院である。

塩田 この地区に塩田多し、製塩法を記す。

鳴き砂 池田村 歩履に異声有ことを覚える。

能登の俗、婦人の役するは他州の比べ酷となす。

輪島へ 山間の小村を経て輪島に着く。

15日 人家三千戸、南は鳳至町、北は河井(河合)町

と言う。髹器(きゆうぎ、漆器)素麵(そうめん)

③①機具巖 ③②鷹巢山 ③③巖門

は天下の景品とほめてゐる。

袖ヶ浜に行く。牛頭天神を祀つてゐる。暴れ祭りが行われる。

16日

輪島滞留 風雨殊に激しく、一日留まる。

③④ 風雨の步履自由難し。

17日

輪島発

総領、輪島の町の様子。

七島は餅之島(トドジマ) 竹生島、御厩島(クリヤジマ)、新魂島(アラミサキシマ) 中子島、鯨島、大島、重倉島(ヒグラジマ)(舢倉島)よりなる。九孔螺多し(アワビ)。輪島の海女家は夏の間家を挙げて此の島に移り、アワビ取りに励む。

時国 ハマナス多し。能登の平家の郷である。平大納言「平時忠」の子孫で、189坪の大民家がある。現当主は第25代目で豪農である。曾々木海岸のルートを撰ぶ。岩山の横に沿って進む。巨岩数百あり。波は雷鳴の様に怒濤の響きを起している。

天門冬Ⅱクサスギカズラ(ユリ科)

藤Ⅱフジ(マメ科)

苧麻の一種Ⅱカラムシ(イラクサ科)

犬朱慮Ⅱイヌシヨウマ(キンポウゲ科)

ああ能州の奇、余既に大半を悉す。然れども、今日の景の甚だ佳にして、今日の路の甚だ危険なるが如きは、これより先未だ観ざる所なりとこの一日の思いを記している。

18日

清水発 片岩、大谷、馬繫、鰐崎、笹波、高尾と進む。

草零陵香Ⅱ香り草、メボウキ(トウダイクサ科)

紅毛芹Ⅱパセリ、ツボクサ(シソ科)

19日

高尾発、狼煙、飯田へ
折戸より河浦、狼煙、山伏山、寺家、粟津、正院

鹿野、飯田に着く。六郷安兵衛家に泊まる。

河浦で鉄砲石を得た。狼煙で蔓菜、ハマチシヤ(ハマミズナ科)を得た。

20日

飯田滞在
森屋久平に会う。夜は春日明神祭日で夜祭りの

山車を観る。

21日

珠洲の有名な、藻寄行蔵が来る。二鳳と三郎右衛門を高岡に先に帰す。以後単独行となる。

22日

越坂村で船に乗り九十九湾に遊ぶ

④能州の山水を褒め称える

小木に着き舟を降りる。宇出津に着く。海面には鰯網を敷いている。鷗鳥が飛ぶ。イカ釣り船多し。新町の氏神、土神祭り、石浦屋義七郎家に泊まる。彼は号を月黨という。裏の倉庫に鯨骨を堆積保管していた。

28日 宇出津、夜景

常椿寺、天徳寺に遊ぶ、氏神を詣る。森屋久平に再会し、イカ船に乗る。尾山屋家に宿をとる。

29日 夜は村人の踏歌をみる。

7月

1日 一詩を製するのみ

⑫旅人の心境を詠う

5日 月黨と宇出津に行く

④④風峡の詩

6日 田浦の海前寺を観る

7日 宇出津の星祭り

8日 九十九湾陸行。イルカ捕獲の話あり(小木)

13日 所口、七尾で温泉をみる。泉は海中の中州の上にある。橋を渡し人を通す。上には家があり周りが囲まれている。湯一瓶を水二瓶とまぜて使

用する。正午 所口へ、七尾は能州の最も繁華の地である。二の宮で宿をとる。

14日 水見、高岡、石動に登る。山草木多し、

春雪下ハハルユキノシタ(ユキノシタ科)。

藤ハフジ(マメ科)

刺楸ハシシュウ、ハリキリ(前出)

竹節人參ハチクセツニンジン(ウコギ科)

石動山天平寺、祠の石「天漢石」は安山岩、隕

石にあらず、巨石信仰の寺である。水見、高岡

に還る。

17日 瑞龍寺 曝書 多数の古書画を観る

20日 高峰元稹氏と会い、立山登山の出発日を決め

る

21日 日下氏母(山本封山の実家)が麦焦がしを作り、

さらに塩茹、白梅を用意して、登山の食料とし

た。天候は弱い雨、明け方に高岡を発つ。元稹、

一僕、与二郎の3人を連れとする。

大門では長橋があるが小舟で川を渡る。小杉―

手先村―富山呉羽山―富山で宿る。

菜店には均亭李(トガリスモモ、スモモ)が並べられている。

23日

芦峠で、与二郎に搗き米3升、草履10双、酒は瓢箪1本を購入させる。成願寺川の渡しを過ぎ、涼村に入る。甚だ珍しい草が多く目にとまる。大森で昼食とする。

猿猴草 II エンコウソウ、*Caltha palustris* var. *enkoso* H. Hara (キンポウゲ科)

リュウキンカ *Caltha palustris* var. *nipponica* (キンポウゲ科)

(正橋氏は本種の写真を掲載しているが文中には猿猴草が記載されている。この二種の草本は別種である。)

岩峠寺に着き、ここより山道に入る。横江村、広い原野を1里余り下り、称名川に臨む。垣村、秀山を越えて、蘆峠で宿をとる。

次に採集した植物名を記す。

紅花 II *ベニバナ (キク科) 蘆峠

蝸袋 II ホタルブクロ (キキョウ科) 蘆峠

甘遂 II *カンスイ、ナツトウダイ (トウダイグサ科) 蘆峠

山蓼 II 牡丹蔓 ボタンズル (キンポウゲ科) 蘆峠

木本响吻 II 黄精葉响吻ナベワリ (ビャクブ科)

蘆峠

般之木 II ハンノキ (カバノキ科)

斑葉鶏腿児 II カワラサイコ (バラ科) 蘆峠

(救荒本草通解 卷之三、岩崎常正識)

24日

立山入山、全員9人で溪谷に沿って登る。藤蔓橋を渡り、小金坂、草生坂、材木板を登る。巨岩石に驚く。童杉より弥陀ヶ原に至る。広野をなし、高山植物の群生地となす。

豆菜 II イワイチョウ (ミツガシワ科) 弥陀ヶ原

珍車 II チングルマ (バラ科) 弥陀ヶ原

一の谷を登り、畜生ヶ原まで行くが、日暮れとなる。室堂に宿す。

25日

三山巡り。本山、浄土山に登るも悪天候におわる。雷鳥を観察する。室堂に宿す。

㊸立山山頭望洛漬 (これ以後は詩作については省略する。)

26日

地獄谷を巡り後に下山して蘆峠に宿す。

27日

富山に宿し、翌日、高岡・日下氏の家に帰る。立山で収穫した草木を次に併せて記す。

(一)

鬼白 II 山荷葉 *サンカヨウ (メギ科) 姥懐

- (2) 衣笠草 || *キヌガサソウ (ユリ科) 姥懐
- (3) 刺款冬 || シカントウ フキ (キク科) 二谷、姥懐
- (4) 大葉花石菖 || オオバセキシヨウバ (ユリ科) 弥陀ヶ原
- (5) 金光花 || キンコウカ (ユリ科) 弥陀ヶ原
- (6) 御蓼 || オンタデ (タデ科) 室堂、
- (7) 衛須蘭土勢茂須 || アイスランドモス (苔類) 浄土山
- (8) 凍草 || (不詳) 浄土山
- (9) 金梅草 || ミヤマキンバイ (バラ科) 御前
- (10) 銀梅草 || ギンバイソウ (ユキノシタ科) 御前
- (11) 三つ葉黄連 || ミツバオウレン (キンポウゲ科) 桑谷
- (12) 苔桃 || コケモモ (ツツジ科) 獅子鼻
- (13) 峯針 (一名恩能礼) || 斧折樺 (カバノキ科)
- (14) 楓唐松 || モミヅカラマツ (キンポウゲ科) 二谷
- (15) 田内草 || ドクダミ (ドクダミ科)、二谷
- (16) 菊款冬、款冬花 || キクタントウ (キク科) 二谷
- (17) 御前橘 || ゴゼンタチバナ (ミズキ科) 桑谷
- (18) 白山で最初に発見された本草。
鶴舞草 || ツルマイソウ (ユリ科) 桑谷
- (19) 豆菜 || イワイチョウ (ミツガシワ科) 弥陀ヶ原
- (20) 珍車 || 児舞 チングルマ (バラ科) 弥陀ヶ原
- (21) 獄樺 || (不詳)
- (22) 通賀松 || 通賀桜、ツガサクラ (ツツジ科) 室堂
- (23) 黄花通賀松 || 梅松 ツガマツ (マツ科) 室堂
- (24) 葱菅藜蘆 || *シユロソウ (ユリ科) 室堂 (25)
- 蕪藜蘆 || *バイケイソウ (ユリ科) 室堂 (26)
- 岩金梅 || イワキンバイ (バラ科) 室堂
- (27) 唐松草 || カラマツソウ (キンポウゲ科) 一谷
- (28) 白花地榆 || シロバナジユ、ワレモコウ (バラ科) 一谷
- (29) 白花竜胆 || シロバナリンドウ (リンドウ科) 一谷
- (30) 鹿子草 || 草下毛、カノコソウ (オミナエシ科) 二谷
- (31) 立山竜胆 || タテヤマリンドウ (リンドウ科) 室堂

- (32) 粘魚鬚Ⅱヤマガシユウ 山荷首鳥(ユリ科) 室堂
- (33) 雪笹Ⅱユキササ (ユリ科) 室堂
- (34) 大雪笹Ⅱオオバユキササ、ヤマトユキササ、(ユリ科) 室堂
- (35) 五葉莓Ⅱゴヨウイチゴ(バラ科) 室堂
- (36) 鬼燈檠Ⅱキツネノカミソリ(ヒガンバナ科) 室堂
- (37) 観音蓮Ⅱミズバシヨウ(サトイモ科) 桑谷御前
- (38) 白山桔梗Ⅱ岩桔梗、イワギキョウ(キキョウ科)
- (39) 覆盆子一種Ⅱイチゴ(フクボンシバラ科) 一谷
- (40) 白木一種Ⅱウスノキ(ツツジ科) 一谷
- 29日 高岡滞在 船遊び
- 30日 長崎浩斉翁を尋ねる。
- 8月
- 1日 布勢丸山、長崎氏と会う
- 2日 有磯浦
- 3日 兎兎尾Ⅱハクゼンソウ(ゴマノハクサ科)
- 9月 高岡・交友

5日 曾宇山採薬行 (大聖寺)

7日 後谷・片野海岸採薬

金光花Ⅱキンコウカ(ユリ科) 片野

蒼木Ⅱアオキ(ミズギ科) 片野

漏蘆Ⅱヒゴタイ(キク科) 片野

藍菊Ⅱエゾキク(キク科) 片野

13日 鯖波発、栃木嶺を登る。

沙羅樹Ⅱナツツバキ(フタバガキ科) 鯖波

烏頭Ⅱトリカブト(キンポウゲ科) 鯖波

天人草Ⅱテンニンクサ(シソ科) 鯖波

歛形草Ⅱクワガタソウ(ゴマノハクサ科) 鯖波

藤 フジⅡ(マメ科) 鯖波

志駝Ⅱシダ(ウラボシ科) 鯖波

四照花Ⅱヤマボウシ(ミズギ科) 鯖波

木本鈎吻Ⅱナベワタリ(ビヤクブ科) 鯖波

17日 帰宅

まとめ

『入越日記』山本溪山著の解説書である本書は、故正橋剛二先生のご遺稿を刊行されたものである。溪山の漢文書きの日記は、副標題に示された能登半島への

採薬行の記録である。採集した薬草類は漢名で記載されているが、資料の腊葉標本の製作を行っているか、否かは不明である。京都から金沢經由で高岡を経て能登に入り一回りの長い旅をしたが、記載された植物各々を植物図鑑で調査した結果、薬用植物類を多数採集していたことが明らかとなった(表1)。また、何故か能登半島の外浦側での採薬が多く、内浦、富山湾側での採薬は殆ど行われていなかった。

山本読書室の会員との旧交を温めた宴はしばしば各地で行われていた。亡羊の六男である溪山にとつては、この旅は修行の内であつたかも知れない。地方会員の温かい励ましにより、この採薬行の前半を遂行することができたのである。能登地域および立山地域での採薬で219種の野草を得ることができたことは、長途の旅が成功であつたと考えられる。詩作82首には旅の感激を表していた。故正橋先生の労作を読み、薬草を中心として感想を記したためした次第である。

文献

(1) 板垣英治、「フグの子糖漬け」化学と工業

第58巻、第12号、2005年、1415頁

(2) 牧野新日本植物図鑑、(北隆館) 1977年

(3) 原色牧野和漢薬草大図鑑(北隆館) 1088年

(4) 加賀能登の植物図譜、小牧 旌、同書刊行会
(七尾) 1987年

(5) 「救荒本草通解」卷之三、岩崎常正識 国会図書館デジタルライブラリー文化12年酉子
1861年

加賀・能登の植物

原書記載植物名	解説した植物名	分類科名、	採集地	備考、薬効など
大和原	イワガラミ	ユキノシタ科	柳瀬	婦人の冷え性に効あり
罌子桐 とうと	アブラキリ	トウダイグサ科	同上	植物油採取
草牡丹	ヤマシヤクヤク	ボタン科	同上	薬用には根茎、根を使用、去痰、鎮咳、喘息に効
鵝掌草がしょうそう	ニリンソウ	キンポウゲ科	同上	根茎に疼痛、解毒作用あり
延齡草=立葵	チチアオイ	ユリ科	同上	根茎、利尿作用
延胡索	エンゴサク	ケシ科	同上	鎮痛、鎮痙作用
鍼形草	クワガタソウ	ゴマノハグサ科	同上	利尿、解熱作用
頭陀薬種、黄水枝	ズダヤクシユ、オウスイシ	ユキノシタ科	同上	咳止め
紺蓮	ベニハス	スイレン科	椿井	解熱、下痢止め
七葉樹	トチノキ	ムクロジ科	同上	果実を食用にする
桑皮樹	トネリコ	モクセイ科	大聖寺	樹皮を薬用を使用
ハマエンドウ	ハマエンドウ	マメ科	小松	種子、疥癬、切り傷、リュウマチ、食用
ハマボウフウ	ハマボウフウ	セリ科	同上	葉を食用にする
山芹菜	ナベナ	マツムシソウ科	金沢	葉を食用にする
艾、艾葉 がいよう	ヨモギ	キク科	卯辰山	胃腸疾患、喘息、腰痛など
木藨蘆 もくほろ	ハナヒリノキ	ツツジ科	同上	ウジコロシ、便所の殺虫剤
木本黄精薬鉤吻	カナウツギ	バラ科	同上	断腸草、毒性強い
車水木	クルマミズキ	ミズキ科	同上	材を細工用を使用
藤木	ヤマエンジュ	マメ科	同上	種子を使用、便秘
鍼形草	クワガタソウ	ゴマノハグサ科	同上	利尿作用あり
赤茂能 あかもの	イワハゼ	ツツジ科	同上	鎮痛消炎作用
刺楸、ししゅう	ハリギリ	ウコギ科	金沢	用材は下駄作りに使用、樹皮を薬用に使用
鬼督郵 きとくゆう	スズサイコ	ガガイモ科	↓	難病に効あり
くるまばそう	クルマバソウ	アカネ科	俱利伽羅	防虫、貧血、嘔吐、香料など
大戟	タカトウダイ	トウダイグサ科	高岡	根部は有毒
狗舌草	オグルマ	キク科	同上	利尿作用あり
薯蕷	ナガイモ	ヤマイモ科	同上	滋養強壮、整腸作用
菖蒲	ショウブ	ショウブ科	同上	消化器疾患、健忘症、神経痛など
艾葉	ヨモギ	キク科	同上	胃腸疾患、喘息、腰痛 など
玫瑰、浜梨	ハマナス	バラ科	出村川尻	血行改善、通常、茶として飲用
青蘭	ムシヤリンドウ	シソ科	同上	鎮痛作用
綿葉	ニシキソウ	トウダイグサ科	富来	利尿作用、駆虫作用
鬼督郵、きとくゆう	スズサイコ	ガガイモ科	同上	難病に効あり
四照花	ヤマボウシ	ミズキ科	同上	下痢、腹痛
蛇床子	ヤブジラミ	セリ科	七海	皮膚疾患
木本忍冬 にんとう	スイカズラ	スイカズラ科	同上	果実を鎮痙、利尿、抗炎症、など
浜菊	ハマキク	キク科	同上	
砂引岩薺	不詳			
仙台萩	センダイハギ	マメ科	同上	
蝦夷車前	オオオオバコ	オオバコ科	同上	咳、痰、腫れ物、利尿剤
纏華 らんか	モクゲンジノキ	ムクロジ科	総持寺	涙目の治療
琉璃	リリソウ	ムラサキ科	同上	染料
立波	タツナミソウ	シソ科	同上	強壯薬、通経薬
日光萩	ニッコウハギ	マメ科	同上	婦人病、めまい、のぼせ
下毛	シモツケソウ	バラ科	同上	化粧品に使用
黄菜	キンリンソウ	ベンケイソウ科	同上	虫刺され、浅い傷などの治療
菩提樹	ボダイジュ	シナノキ科	同上	葉は抗炎症剤、果実は下剤、樹皮は淋病、潰瘍の治療
威靈仙	クカイソウ	ゴマノハグサ科	同上	利尿薬
天門冬 てんもんとう	クサスギカズラ	ユリ科	曾々木	塊根、滋養強壯薬
芋麻の一種	カラムシ	イラクサ科	同上	止血作用
犬朱慮	イヌショウマ	キンポウゲ科	同上	口内炎、火傷
草零陵香	メボウキ	トウダイグサ科	高尾	香料
紅毛芹	ツボクサ	シソ科	同上	ツボクサ茶として飲用
蔓蓼	ハマチシヤ	ハマミズナ科	狼煙	ツルナ茶として飲用、健胃薬
春雪下	ハルユキノシタ	ユキノシタ科	石動	中耳炎、腫れ物など
志駝	シダ、ワラビ	ウラボシソウ科	同上	根茎部 下痢、黄疸、高血圧の予防
竹節人 ちやくせんじん	トチバナニンジン	ウコギ科	同上	止血、鎮痛、消炎、強心、肝疾患の治療

立山の植物

原書記載植物名	解説した植物名	分類科名	採集地	備考、薬効など
均亭李	トガリスモモ	バラ科	森田	巴旦杏、緩下剤、貧血に使用
南瓜	カボチャ	ウリ科	同上	風邪、中風予防
紅花	ベニバナ	キク科	芦峠	活血、通経、養血作用
蚕袋	ホタルブクロ	キキョウ科	同上	若葉を食用にする。
甘遂（カンスイ）	ナツトウダイ	トウダイグサ科	同上	女性の冷え性、促乳剤
山蓼（牡丹蓼）	ボタンヅル	キンボウゲ科	同上	神経痛、リュウマチ治療
木本响吻	ナベワリ	ビヤクブ科	同上	有毒植物
殷文木			同上	
斑葉鶏腿児			同上	
豆菜			弥陀が原	
珍車	チングルマ	バラ科	同上	薬草、果実は苦い
兎児尾	ハクゼンソウ		同上	
款各	フキ	キク科	同上	咳、痰、喉の炎症、打撲傷、健胃剤
甜葉（甜茶）	テンヨウ、	バラ科	同上	糖尿病の甘味料、肥満
沙羅樹	ナツツバキ	ツバキ科	同上	果実、緩下剤、樹皮、淋病
猿猴草	エンコウソウ	キンボウゲ科	芦峠	咽喉結核、喘息
鬼臼（山荷葉）	サンカヨウ、	メギ科	姥懐	果実の生食
蚤休（衣笠草）	キヌガサソウ		同上	
刺楸冬			二谷	
大葉花石菖	オオハナセキショウバ	ユリ科	弥陀が原	
金光花	キンコウカ	ユリ科	同上	黄色の花
御蓼（柳蓼）	オンタデ	タデ科	室堂	食あたり、虫刺され、利尿
衛須蘭土勢茂須	エスランドモス	コケ科	浄土山	外人名のついたコケ
凍簞			同上	
金梅草	ミヤマキンバイ	バラ科	御前	
銀梅草	ギンバイソウ	ユキノシタ科	同上	
三つ葉黄連	ミツバオウレン	キンボウゲ科	桑谷	健胃整腸、下痢止め
苦桃	コケモモ	ツツジ科	獅子鼻	尿道炎、利尿
峯針（斧折櫛）	ミネバリ	恩能礼	同上	強靱な用材
楓唐松（紅葉唐松）	モミジカラマツ	キンボウゲ科	二谷	
田内草			同上	
菊款冬（款冬花）	キクタントウ	キク科	同上	フキの別名、ツワブキの別名、呼吸器疾患
御前橘	ゴゼンタチバナ	ミズキ科	桑谷	白山で最初の発見された。
鶴舞草	ツルマイソウ	ユリ科	同上	緑色の花
豆菜			岩一葉	
珍車（児舞）	チングルマ	バラ科	弥陀が原	
獄樟			同上	
通賀松（通賀桜）			同上	
黄花通賀松			室堂	
葱菅菖蘆（棕櫚草）	シュロソウ		同上	毒草、虫刺され、緩下剤
蒜菖蘆	バイケイソウ	ユリ科	同上	緑色花、有毒、ミヤマバイケイソウ
岩金梅	イワキンバイ	バラ科	室堂	黄色の花
唐松草	カラマツソウ	キンボウゲ科	一谷	白い細い花卉の花、
白花地榆	シロバナジュ	バラ科、吾亦紅	同上	根、根茎、止血、鼻血、血便
白花龍膽	シロバナクヂヤマリンドウ	リンドウ科	御前	
鹿子草（草下毛）	カノコソウ	オミナエン科	二谷	根から精油が得られる、吉草根
立山龍膽	タテヤマリンドウ	リンドウ科	室堂	
粘魚鬚（山荷首烏）	ヤマガシユウ	ユリ科	同上	
雪笹	ユキササ	ユリ科	同上	果実は有害、頭痛、乳腺炎
大雪笹	オオバユキササ	ユリ科	同上	亜高山帯の林にあり、白い小花
五葉莓	ゴヨウイチゴ	バラ科	同上	果実は食用可
鬼燈檠	キツネノカミソリ	ヒガンバナ科	同上	有毒、
観音蓮	ミズバショウ	サトイモ科	桑谷	食用不可
白山桔梗（岩桔梗）	イワキキョウ	キキョウ科	御前	
覆盆子 一種	イチゴ、フクボンシ	バラ科	一谷	強壯、強精薬
白木 一種	ウスノキ	ツツジ科	同上	

原書記載植物名

兎児尾
金光花
蒼木
漏蘆
藍菊
沙羅樹
烏頭
天人草
鰈形草
藤
志駝

四照花

解説した植物名

ハクゼンソウ
キンコウカ
アオキ
ヒゴタイ、(ヒンゴウタイ)
エゾキク
ナツツバキ
トリカブト
デンニンゴサ
クワガタソウ
フジ
シダ

ヤマボウシ

分類科名

ゴマノハクサ科
ユリ科、後谷
ミズキ科
キク科
キク科
フタバガキ科
キンボウゲ科
シソ科
ゴマノハクサ科
マメ科
ウラボシ科

ミズキ科

採集地

同上
片野
同上
同上
同上
同上
同上
同上
同上
同上
同上
同上

同上

備考、薬効など

ルリトラノオの別名、神経痛

薬用
紫色の花
紫色の花
用材、塗料、ワニス、香料
塊根、附子、強心作用、鎮痛作用
吸蜜植物、白色花
強心剤、うっ血性心不全の特効薬
種子、下剤
ヒトツバの乾燥葉石菖(せきい)は泌尿器系の諸疾患に効あり。尿路結石、血尿、腎炎
乾燥果実を下痢、腹痛に使用

正橋剛二解説、山本溪山著「入越日記」
能登・越中・立山に薬草を求めて
(桂書房、2017年12月20日初版発行A5判、197頁 定価3千円+税)

